あとがき

昨年２月に「苦海浄土―わが水俣病」の著者石牟礼道子さんが９０歳で亡くなった。その石牟礼道子さんと天皇皇后両陛下との交流を中心に、水俣病をめぐる人々を描いた作品「ふたり――皇后美智子と石牟礼道子」高山文彦著が講談社文庫に入った。

今年は天皇の退位があり元号が改正される。昭和は戦争と廃墟の中から高度成長を遂げた時代であった。平成は直接的な戦争はなかったが、東日本大震災、原発事故、熊本地震など大きな災害が続いた時代である。近代産業社会がその急成長の陰で生み出した公害の災禍はなお続いている。環境破壊はさらに進行している。経済価値中心の考え方がいかに風土の荒廃をもたらすかは水俣病が端的に示しているところだ。

両陛下は戦争の３００万人の死者の霊を弔うように、サイパン、沖縄など慰霊の旅を続けてこられたが、水俣へは２０１３年１０月２７日に訪問されている。

水俣病の犠牲者を悼み、患者の声を聴くためである。水俣病資料館にて「語り部の会」の人たちと面会したのち、会長の緒方正美さんの講話を聴いた。漁師だった緒方さんの祖父は急性劇症型水俣病で死亡し、妹は胎児性水俣病患者である。

話を聴いた後、天皇陛下は異例といえるスピーチをされた。「ほんとうのお気持ち、察するに余りあると思っています。やはり真実に生きるということができる社会をみんなでつくっていきたいものだと、あらためて思いました。ほんとうにさまざまな思いをこめて、この年まで過ごしていらしたということに深く思いを致しています。今後の日本が、自分が正しくあることができる社会になっていく、そうなればと思っています。みながその方向に向かって進んで行けることを願っています。」　また皇后は「ほんとうにつらい人生を歩んで来られたのですね。ほんとうにいいお話を聞かせていただき、ありがたく思っています。これまでのご苦労を考えると、ほんとうに心が痛みます。これからも多くの人たちのために、無理をしないで語り部を続けてほしいと思っています。」と言葉をかけられた。またこの直前には２名の胎児性水俣患者との面会を果たしていた。異例ずくめの水俣訪問である。

石牟礼道子の美智子皇后への気持ちは次のようだ。「あんな知的な女性にお会いしたのははじめてです。とてもお優しくて、美しい方でした。こぎゃんか女性をお嫁さんにもらわれた天皇さんは、偉かです。」

天皇陛下は水俣訪問の翌年、歌会始で次の御製を詠んだ。

慰霊碑の先に広がる水俣の海青くして静かなりけり

緒方さんは水俣の悲劇が繰り返されないようにと「祈りのこけし」を作り続けている。両陛下は帰京するときに２つを持ち帰った。

水俣病が世界的に注目される中、我々がもっと真摯に被害者の思いに向き合い、この悲劇を世界に発信していかねばならないと思う。

長年にわたって人間環境学科の礎を築かれ発展に寄与されてきた野田文隆先生が去る１月３日ご逝去された。先生が大正大学にお見えになったのは平成１０年５０歳を迎えた時で、以来１５年間にわたり学部、大学院で指導に当たられてきた。含羞を含んだ笑みを浮かべ　“やあ、どうですか”と語りかける先生の優しい顔が目に浮かぶ。まことに残念である。謹んで哀悼の意を表します。

副学長　人間環境学科教授
木元　修一